HAL
open science

ドゥナン（与那国）語の簡易文法と自然談話資料

Masahiro Yamada, Thomas Pellard, Michinori Shimoji

To cite this version:

Masahiro Yamada, Thomas Pellard, Michinori Shimoji. ドゥナン（与那国）語の簡易文法と自然談話資料. Takubo, Yukinori. 琉球列島の言語と文化：その記録と継承 Ryūkyū rettō no gengo to bunka: Sono kiroku to keishō [The languages and culture of the Ryūkyū archipelago: Their recording and transmission], Kuroshio shuppan, pp.291–324, 2013, 9784874245965. ⟨hal-01289790v2⟩

HAL Id: hal-01289790

https://hal.science/hal-01289790v2

Submitted on 21 Apr 2020

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

山田真寛・Pellard, Thomas・下地理則. 2013.「ドゥナン（与那国）語の簡易文法と自然談話資料」田窪行則（編）『琉球列島の言語と文化：その記録と継承』291–324. 東京：くろしお出版.

ドゥナン（与那国）語の簡易文法と自然談話資料

山田真寛・Thomas Pellard・下地理則

1　言語と話者

本稿は、与那国島（沖縄県八重山郡与那国町）で話されている琉球諸語の一つ、ドゥナン語 (*dunan-munui*) の簡易文法を自然談話資料とともに提示する。ドゥナン語は、主に 50 歳代後半以上の与那国島民が母語として使用しており、話者数は約 400 人（島民数の約 25%）である。世代間の伝承が断絶しており、UNESCO に登録されている消滅危機言語である。詳しくは山田・Pellard (2013)参照。

2　音声と音韻

2.1　母音

ドゥナン語は、前舌 [a] と後舌 [ɑ] で実現する広母音の/a/、非円唇前舌狭母音の/i/ ([i]~[ɪ])、円唇後舌狭母音/u/ ([u]~[ʊ]) からなる 3 母音を基本とした母音体系を持つ。先行研究ではこの 3 母音のみが音素と認められているが、狭母音/u/とは異なる半狭母音の [o] も音素である蓋然性がある。ただし/o/の分布は極めて限られており、少数の感嘆詞以外は終助詞の *do* にしか現れないようである。[e] も確認されるが、[o] 同様終助詞 *je* にしか現れない。若年層の話者では語末の [i] が [e] に近い発音となることもある。

音声的には長母音が現れるものの、母音の長短は弁別的ではないと思われる。助詞などが後続しない 1 モーラ語の母音が基本的に長音化する他、aragu「とても」([aɾagu]~[aɾaːgu]) や buru「すべて」([buɾu]~[buːɾu]) などのような副詞に特定の表現機能をともなう長母音が現れることもある。

2.2 子音

ドゥナン語の子音体系を表1に示す（音素記号の後の括弧書きは本稿で使用する正書法）。ドゥナン語の子音体系の一番の特徴は破裂・破擦音における強子音 (Fortis)・弱子音 (Lenis)・有声音の 3 項対立である[*1]。強子音は従来「（無気）喉頭化音」[*2]と呼ばれてきた音で、発声器官の緊張をともなって呼気流に抵抗を起こしながら強く発音される「硬い」子音である。それに対して弱子音は発声器官の弛緩と軽い気音をともなって弱く発音される「軟らかい」音で、共通日本語の無声子音（清音）に近い。強弱の区別は語頭にしかなく、語中における無声破裂・破擦音は音声的に強子音に近い形で実現するのが普通である。本稿の表記では語頭の強子音は二重子音、弱子音は h を添えて、対立のない語中の無声子音は単一子音の記号で表記する。

表1　ドゥナン語の子音

	唇音	歯音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
弱破裂音		/tʰ/ (th)		/kʰ/ (kh)	
強破裂音・破擦音	/pˀ/ (pp)	/tˀ/ (tt) /cˀ/ (cc)		/kˀ/ (kk)	
有声破裂音	/b/ (b)	/d/ (d)		/g/ (g)	
鼻音	/m/ (m)	/n/ (n)		/ŋ/ (ŋ)	
無声摩擦音		/s/ (s)			/h/ (h)
弾き音		/ɾ/ (r)			
接近音	/w/ (w)		/j/ (y)		

母音の前以外の位置ではすべての鼻音の対立が中和され、本稿の正書法では n と表記する。共通日本語の撥音「ん」のように、後続する子音の調音点に同化して発音される (ng [ŋg], nd [nd], nb [mb])。語末では軟口蓋音 [ŋ] で撥音され、共通日本語のような口蓋垂鼻音が基本的に現れない。c(c) と表記されている子音は無声歯音破擦音 [tsˀ] である。その他に注意すべき異音としては i・y

*1 /pˀ/と/cˀ/には対応する弱子音が存在しない。

*2 強子音の調音における喉頭などの発声器官の状態を吟味した実験研究がないため、本稿では「強子音」と呼ぶことにする。

前における c(c)・s・h の口蓋化 ([tɕʔ]、[ɕ]、[ç]) と w・u の前における h の唇音化 ([ʍ]~[ɸ]) がある。

2.3 音節

ドゥナン語の音節構造は比較的単純である。頭子音も尾子音も随意で、y・w の渡り音を含む連続以外、音節初頭の子音群が許されない。音節末尾には中和された鼻音しか現れない。音節の中核部には最大 2 母音が現れる。つまりドゥナン語の音節構造は次のようになっている[*3]。

(1) $(C(G))\,V_1\,(V_2)\,(N)$

中和された鼻音も単独で音節を形成することができるが、このような小音節 (minor syllable) は破裂音・破擦音・鼻音に先立つ語頭位置に限られる（例：n.da「君」）。

2.4 モーラ

すべての母音がモーラを担い、音節末尾もしくは中核部に位置する鼻音もモーラを担う。音節は軽音節（1 モーラ：(C)(G)V、N）、重音節（2 モーラ：(C)(G)VV、(C)(G)VN）、超重音節（3 モーラ：(C)(G)VVN）に分けられる。超重音節は基本的に複数の形態素からなっており、再音節化 (CVVN > *CV.VN) が行なわれない。

モーラがドゥナン語において重要な単位であることは従来認められてこなかったが、モーラの役割は二つの規則に現れる。まず、単語の長さに対する制約が存在し、自立語は最小 2 モーラを含まなければならない。その結果、(C)(G)V 型の単語が単独で現れるときその母音が長く発音される。さらに軽音節と重音節が下降調を担えるかどうかで異なる。1 モーラからなる軽音節は下降調を担うことができず代わりに高調が現れるのに対して、2 モーラ（以上）からなる重音節の場合下降調が実現できる。2 モーラからなる NC(G)V においても下降調が実現できないことから語頭の鼻音が個別の音節を形成することがわかる。

[*3] C：子音、V：母音、G：渡り音、N：鼻音。

2.5 音調 (アクセント)

ドゥナン語の単純名詞は 3 型の音調対立を示しており、語の長さに関係なく音調が語全体に付与されるいわゆる語声調乃至 N 型アクセントの体系である。ドゥナン語ではピッチ高低の差が小さく、音調型の断定が容易ではない。そのため本節以外では音調型を基本的に表記せず、本節の記述は主に上野 (2010; 2009; 2011) にもとづくものである。

3 型をそれぞれ「高・低・下降」のように呼ぶことにするが、それぞれ先行研究の「A・B・C」に相当する。高型は、多音節語では語頭音節が低く、それ以降の音節は高いが、一音節語では全体的に高い。低型は語全体が比較的低く平らに発音される。下降型の語は高型に似ており、多音節語の場合低く始まりその後高くなるが、語末音節が重音節の場合下降調で発音される。軽音節で終わる場合、下降調ではなく高音調で発音され、高型との区別がない。ただし助詞の =*n*「も」などを後続させると重音節が形成され下降調が実現する。さらに、下降調が実現していない場合でも次の語にダウンステップが生じる (上野 2010)。本稿で使う表記法では高型に [´]、低型 [`]、下降型に [ˆ] の記号を語の最初の母音の上につけて書き分ける。

表2　ドゥナン語の名詞の音調

	高型			低型			下降型		
1σ	ná「名」	[ná:]	H	khì「木」	[kʰì:]	L	wâ「豚」	[wâ:]	F
	mái「米」	[máí]	H	hài「南」	[hài]	L	hâi「針」	[hâì]	F
2σ	háci「橋」	[hàtɕí]	LH	hàna「花」	[hànà]	LL	hâci「箸」	[hàtɕí]	LH
	háci=n「橋も」	[hàtɕíŋ]	LH	hàna=n「花も」	[hànàŋ]	LL	hâci=n「箸も」	[hàtɕîŋ]	LF
	dúrai「集会」	[dùɾáí]	LH	mùnui「言葉」	[mùnùì]	LL	mâgai「椀」	[màgâì]	LF
3σ	mínaga「庭」	[mìnágá]	LHH	dìmami「落花生」	[dìmàmì]	LLL	dâmami「山亀」	[dàmámí]	LHH

3 品詞

ドゥナン語には名詞類と動詞類の他に副詞、役割標識、連体詞、接続詞、感嘆詞などがある。琉球諸語の多くと同様に、いわゆる形容詞 (property concept words) が形態統語論的に動詞と同じふるまいを示しており、動詞類の下位区分

に入れることができる。ほとんどの品詞は音韻論的に自律しているが、役割標識は前の句の最後の語に組み入れられる接語である。

3.1　名詞類

名詞類は名詞句の主要部となりうる語であり、名詞句は述語の項またはコピュラ述語として機能する。名詞類はさらに名詞、代名詞、数詞に分けられる。

3.2　動詞類

動詞類には一般動詞（以降は単に「動詞」とも）と状態動詞（「形容詞」）がある。動詞類は屈折し節の述語となる。一般動詞と状態動詞の活用は基本的に同じだが、否定形だけが大きく異なる。一般動詞の否定形は*-anu*（-例：*khag-anu-n*「書かない」）という接尾辞によって形成されるのに対し、状態動詞は*-minu-*をともなう（例：*thaga-minu-n*「高くない」）。

3.3　副詞

副詞は述語または節全体を修飾する。語根からなる副詞の他に、*thaga*「高」→ *thaga-gu*「高く」、*ninsa*「遅」→ *ninsa-gu*「遅く」などのように状態動詞の語根から*-gu* をともなって派生される副詞がある。

3.4　役割標識

役割標識は名詞句に後続し、その名詞句の統語、意味、語用的役割を表す接語である。役割標識には主格 *=ŋa*、方向格 *=nki* など種々の格標識、主題標識 *=ya*、焦点標識 *=du* が含まれる。複数の役割標識が一つの名詞句に膠着することができ、その場合格を表すものが最初に現れ、その次に主題・焦点の標識が接続する。

3.5 その他の品詞

連体詞の *khunu*・*unu*・*khanu* は名詞句に前置する指示修飾語である。*khunu* と *unu* は指示代名詞 *khu*・*u* に属格標識の *=nu* が続いた形式と分析可能だが、*khanu* の場合は対応する代名詞が *khari* なのでその分析が不可能である。接続詞は *=tasi*「ながら」、*=yungara*「ので」、*=ŋa*「が（逆接）」、*=tin*「ても」のように、従属節に後続し主節との関係を示す語である。感嘆詞は屈折せずに *di*「さあ（誘い掛け）」のように、感嘆を表す品詞である。

4 形態論

4.1 名詞形態論

ドゥナン語における名詞の形態論構造は、(2) のように示すことができる。

(2) （接頭辞-）（語根 +）語根（-指小辞）（-複数）

4.1.1 名詞の接辞

ドゥナン語の接辞のほとんどは接尾辞であるが、*ubu-*「大」（例：*ubu-ici*「大石」）や *mi-*「雌」（例：*mi-uci*「牝牛」）や *bigi-*「雄」（例：*bigi-uci*「雄牛」）のように、形容や性質を表す名詞接頭辞も存在する。名詞は小ささ・若さ・愛称を表す指小接尾辞*-ti*（例：*agami-ti* 子ども-DIM「小さい子ども」、*inu-ti* 犬-DIM「子犬」）を取ることができる。ドゥナン語の名詞は数に関して neutral であり、単数と複数を指定する必要なく単数・複数両方を表すことができる。

(3) *inu=ŋa maasiku bu-n.*
犬 =NOM たくさん いる-IND
‘たくさんの犬がいる。’

しかし含有 (associative)（例：*Tharu-nta*「太郎とその他の人」）または集合 (collective)（例：*inu-nta*「犬の集団」）複数を表す *-nta* によって名詞の数を表すこともできる。含有複数からの派生である曖昧性を表すこともある（例：*khwaci-nta*「お菓子など」、*khuma-nta*「ここらへん」）。

4.2 数詞と類別詞

ドゥナン語の数詞は数詞語根 (1 *ttu*, 2 *tta*, 3 *mi*, 4 *du*, 5 *ici*, 6 *mu*, 7 *nana*, 8 *da*, 9 *khugunu*, 10 *thu*) に類別詞が後続する。類別詞の選択は数えられる対象の性質や形による（人間：*-taintu*、動物：*-gara*、無生物：*-ci*、平らな物：*-ira*、樹木：*-mutu*、日にち：*-ka/-ga*、回数：*-muruci*、歩数：*-mata*、握り：*-ka* 等）。数詞＋類別詞の結合において不規則な音韻交替や補充形が見られ、さらに漢語由来のものも多く見られる。

4.2.1 代名詞

代名詞は、発話行為の参与者を指す対話代名詞、発話行為の参与者以外のものを指す指示代名詞、再帰代名詞、場所の代名詞、疑問代名詞に分類できる。

人称代名詞は他の名詞類と異なり、複数指示の場合、常に複数の接尾辞をともなう。さらに、数や格を表す語形が不規則となる場合が多い。特に一人称代名詞の属格形が特異で、語根そのままか属格 *=nu* ではなく主格 *=ŋa* によって形成される。

4.2.2 格

格標識は名詞句に後続し、名詞句全体を作用域とする。格標識は自立していないが、接辞ほどホストに拘束されておらず、一部が動詞にも接続し接続詞のような機能も持っている。

格標識は動詞の中心的な項（S（他動詞の主語）、A（自動詞の主語）、P（他動詞の目的語））を表示する「直格」の標識とそれ以外の周辺要素を表示する「斜格」の標識に二分される。斜格が常に標識によって表示されるのに対し、中心的な項は標識を取らないのが普通である。ただし、P は常に無標であるのに対し、主格標識 *=ŋa* が S 項と A 項（特に主題化されていない場合）に現れることがある。

表3　与那国の代名詞

	単数	複数
一人称	ânu	bânu(-nta) (EXCL), bânta (INCL)
二人称	ndá	ndí(-nta)
近称	khú	khuntati
中称	ú	ùntati
遠称	khári	khàntati
再帰 1	sá	si
再帰 2	dû, dunudu	
場所・近称	khûma	khumanta
場所・中称	ûma	umanta
場所・遠称	kháma	khamanta
疑問・有性	thá	thanta
疑問・無性	nû	
疑問・場所	nmâ	

表4　ドゥナン語の代名詞の不規則的な語形

	基本形	特殊な語形
一人称（単）	ânu	a=ŋa 主格・属格
一人称（複）	bânu(-nta), bânta	ba=ŋa 主格, ba/bânta 属格
場所・近称	khûma	khûmi 所格
場所・中称	ûma	ûmi 所格
場所・遠称	kháma	khámi 所格
場所・疑問	nmâ	nmî 所格

表5　ドゥナン語の格標識

格	標識	役割
主格	*=ŋa*	S, A（一人称代名詞の場合属格）
属格	*=nu*	所有者、連体修飾
所格	*=ni*	存在・動作の場所・時間、移動先、変化の結果、受取人、比較の基準、受動文の動作主、使役文の被使役者、受益文の受益者
方向格	*=nki*	方向、移動先、変化の結果、受取人、比較の基準、受動文の動作主、使役文の被使役者、受益文の受益者、被害文の被害者
奪格	*=gara*	起点、理由、移動の手段、経路、所在
出格	*=di*	出所
達格	*=ta*	時間・空間的な境界
具格	*=si*	道具、材料、理由、手段
共格	*=tu*	共同の相手、並立
比較格	*=ka*	比較の基準

4.3　動詞形態論

4.3.1　形態的構造と活用クラス

ドゥナン語の動詞体系は様々な音韻変化と形態変化の結果、おそらく日琉語族の中でもっとも複雑である。動詞の大まかな形態的構造を図1にまとめる。1から5の各スロットに一つの形態素を入れることができ、スロット0（語根）とスロット5（活用語尾）のみが必須である。語尾以外の1〜4の接尾辞は語幹の活用クラスを変えることができ、その中の3（アスペクト・否定）と4テンス）の接尾辞はスロット5に現れる中止形・副動詞と共存することはない。

ドゥナン語の動詞形態は語幹と文法諸形式に異形態が多いことが特徴である。異形態の交替は共時的な動機がなく、歴史的な変化の反映である。さらに、語幹と接尾辞それぞれの異形態は、どの形式にどの形式が接続するかが語彙情報として恣意的に決まっており、語幹自体は屈折的な情報を担っていない。ま

た、一つの接続様式がすべての動詞に適用されるわけではなく、活用タイプごとに異なっている。

図1　ドゥナン語の動詞の構造

<table>
<tr><th>0</th><th>(1)</th><th>(2)</th><th>(3)</th><th>(4)</th><th>5</th></tr>
<tr><td rowspan="3">語根</td><td rowspan="3">使役 -amir-</td><td rowspan="3">受動 -arir-</td><td rowspan="2">∅
否定 -anu-</td><td>現在 -u-/∅</td><td>直説 -n</td></tr>
<tr><td>過去 -(i)ta-</td><td>連体 ∅/-ru</td></tr>
<tr><td>完了 -(y)a-/-yu-/-u-</td><td>過去 -(i)ta-
∅</td><td>状況 -iba/-uba
条件 -ya</td></tr>
<tr><td>∅</td><td>∅</td><td>∅</td><td>∅</td><td>命令 -i
禁止 -(u)nna
勧告 -(i)ndangi
中止 -i</td></tr>
</table>

語幹交替・文法諸形式の異形態・語幹と接尾辞各異形態の恣意的な接続様式の三つの要素の結果、他の日琉諸語より遥に複雑な、八つの語幹と数十の活用タイプからなる動詞体系になっている。一つの代表的な活用形や語幹から全パラダイムを予測することが不可能で、少なくとも三つの活用形の情報が必要である。

例えば、完了形以外のすべての活用形が同音である動詞が存在する：*sagun*「割く」→ *satyan* v.s. *sagun*「咲く」→ *satun*、*nirun*「煮る」→ *nyan* v.s. *nirun*「煮える」→ *nyun*。一方、完了形のみから活用タイプを予測することができず、異なる活用タイプに所属しながら完了形が同じ動詞も存在する：*khatun*「勝つ」・*khagun*「書く」→ *khatyan*。

4.3.2　語幹

ドゥナン語における語幹の異形態は比較的多い。語幹の交替は語彙的であり、音韻（形態）的規則によるものではない（表6）。派生規則による分析はデメリットが多く、結局、規則が特定の動詞クラスや接尾辞にしか適用されないという記述になってしまい、説明的妥当性がない。

表6　動詞の語幹交替（分節音のみ）

「引く」	「食べる」	「落とす」	「作る」	「する」	「燃える」
sunk-	pp-	ut-	kkw-	kh-	mw-
sunt-	ppu-	utu-	kku-	khi-	mui-
		utus-	kkur-	khir-	muir-

語幹交替は分節音のみならず、音調型も関与している。低型の動詞の一部は、その活用形の一部が低型ではなく下降型で実現するといったように、どの活用形が音調交替を起こすかは動詞によって異なり、三つのパタンに分けられる（表7）。

表7　動詞の音調交替

	「破る」		「行く」		「休む」		「思う」	
現在直説	dàndan	L	hìrun	L	dùgun	L	ùmun	L
過去直説	dàndatan	L	hìtan	L	dùgutan	L	ûmutan	F
現在否定直説	dàndanun	L	hìranun	L	dûganun	F	ûmanun	F
現在完了直説	dàndasyan	L	hjûn	F	dûgwan	F	ûmwan	F

表8　動詞語幹の例

	用法	「数える」	「歩く」	「思う」	「閉める」	「作る」	「破る」	「燃える」
1	現在形・条件形	dùm-	àig-	ùm-	hú-	kkùr-	dàndir-	múir-
2	否定形	dûm-	àig-	ûm-	h´-	kkûr-	dàndir-	múir-
3	命令形・状況形	dùm-	àig-	ùmu-	hú-	kkùr-	dàndir-	múir-
4	禁止形	dùm-	àig-	ùm-	hú-	kkù-	dàndi-	múi-
5	過去形	dùm-	àit-	ûmu-	hú-	kkù-	dànd-	mú-
6	勧告形	dùm-	àit-	ùmu-	hús-	kkù-	dànd-	mú-
7	中止形	dûm-	âit-	ûmu-	hús-	kkû-	dând-	mú-
8	完了形	dûm-	âit-	ûmw-	hús-	kkwˆ-	dând-	mw´-

このような多様な語幹交替と語幹と接尾辞各異形態の恣意的な接続様式のため、動詞の全体系を 8 語幹体系と想定せざるをえないが、八つの異なる語幹を持つ動詞はない（表8）。

4.3.3 屈折

屈折情報は主に接尾辞によって表されるが、接尾辞にも異形態が多く見られる。一部の屈折接尾辞は異形態の選択が語幹の末尾音によるが（表9）、語幹の選択は動詞の活用タイプや後続する接尾辞によって決定され、そのような交替を音韻論だけでは説明できない。

表9　語幹末尾音による異形態の選択

	禁止	過去	現在	状況
子音終わりの語幹	-unna	-ita-	-u-	-uba-
母音終わりの語幹	-nna	-ta-	∅	-iba-

一方、完了の接尾辞-(*y*)*a*/*yu*/*u*-のうち、どの形式がどの語幹に接続するかは完全に恣意的であり、音韻論的説明が不可能である[*4]。その上、一つの動詞が複数の接尾辞を取ることができ、異なるスロットの接尾辞の連続に特殊なパタンも見られる。

動詞の活用形をスロット 5 の語尾によって表される形態統語的な特徴と機能によって二つに分類することができる。まず自立動詞（independent verb, 定動詞）はムードの標識を取り、統語的に自立している。すなわち、単独で文となることも、主動詞として（複文の中の）主節を形成することもできる。直説法の活用形はテンスやアスペクトの接尾辞を取ることができるが、それ以外のムード（命令、禁止、勧告）はそれができない（表10）。

[*4] 主語が行為者となる動詞は-(*y*)*a*-を、主語が非行為者となる動詞は-*yu*/*u*- を選択するという一般化が可能である。具体例は山田 (近刊) 3.5 節を参照。

表10　自立動詞語形

3	4	5	接尾辞	例:「する」
非完了	現在	直説	-∅-u/∅-n	khirun
	過去		-∅-(i)ta-n	khitan
否定	現在		-anu-∅-n	khiranun
	過去		-anu-ta-n	khiranutan
完了	現在		-(y)a/yu/u-∅-n	khyan
	過去		-(y)a/yu/u-ta-n	khyatan
—	—	命令	-i	khiri
—	—	禁止	-(u)nna	khinna
—	—	勧告	-(i)ndangi	khindangi

一方、中止形や副動詞のような非自立動詞（表11[*5]）は通常（省略の場合以外）主節に現れることはない。そのような動詞形は副詞節や節連鎖、または複合動詞に現れる。非自立動詞の中には状況の副動詞や条件の副動詞のようにテンス・アスペクトの接尾辞を取るものもあるが、中止形や副動詞の多くはテンス・アスペクトの情報を主節の述語からうけとる。

連体形はその名称のとおり連体修飾節（関係節）を形成するのが主な役割だが、主節に現れることも少なくない。強調・感嘆の場合といわゆる「係り結び」構文の場合に見られる（5.10節を参照）。ほとんどの動詞は直説法の形から接尾辞-*n* を取り除いた語幹がそのまま連体形となるが、過去形と完了形及び一部の不規則動詞の場合-*ru* がさらにそれに後続する。

ドゥナン語には中止形に屈折接尾辞を担う補助動詞が続く形式も見られる。補助動詞は尊敬 (*warun*) やアスペクト・ムード（「（て）いる」*bun*、終結 *ccidimirun*、「（て）みる」*nnun*、準備 *utugun*、能力 *ccun*、願望 *busan*）を表し、本動詞との融合の度合いが様々である。一部の補助動詞は本動詞とは別の音韻語を形成し、その結果個別の音調を示し、本動詞との間に焦点標識 =*du* が介入することができる（例：*khati=du buru*「書いている」）。一方、本動詞と一体化し自立しない補助動詞もある（例：*khati-busan*「書きたい」）。

[*5] 完了の形式の例は予測形。

表11　非自立動詞語形

3	4	5	接尾辞	例:「する」
非完了	現在	状況	-∅-∅-iba/uba	khiruba
	過去	状況	-∅-ta-ba	khitaba
	現在	条件	-∅-∅-ya	khirya
	過去	条件	-∅-ta-ya	khitaya
否定	現在	状況	-anu-∅-ba	khiranuba
	過去	状況	-anu-ta-ba	khiranutaba
	現在	条件	-anur-∅-ya	khiranurya
	過去	条件	-anu-ta-ya	khiranutaya
完了	現在	状況	-(y)a/yu/u-∅-ba	khyaba
	過去	状況	-(y)a/yu/u-ta-ba	khyataba
	現在	条件	-(y)a/yu/ur-∅-ya	khyaya
	過去	条件	-(y)a/yu/u-ta-ya	khyataya
—	—	中止	-i	khi
—	—	継起	-iti	khiti
—	—	理由	-ibi	khibi
—	—	同時	-idatana	khidatana
—	—	否定継起	-nki	khiranunki
—	—	目的	-indi	khindi

表12　連体形

3	4	5	接尾辞	例：「する」
非完了	現在	連体	-∅-u/∅-∅	khiru
	過去		-∅-(i)ta-ru	khitaru
否定	現在		-anu-∅	khiranu
	過去		-anu-ta-ru	khiranutaru
完了	現在		-(y)a/yu/u-∅-ru	khyaru
	過去		-(y)a/yu/u-ta-ru	khyataru

4.3.4 派生

品詞の転移を起こさない派生の中には、使役態と受動態という 2 つのヴォイスが含まれる。両方とも語根に直接接続するが、両方が共存することもでき、その場合使役の接尾辞が語根に接続し、受動の接尾辞はそれに後続する。使役態は (*-a*)*mir-*、受動態は (*-a*)*rir-*（否定形 (*-a*)*ninu-*）という接尾辞によって表される。

4.3.5 状態動詞の形態

状態動詞（いわゆる「形容詞」）は一般の動詞とは異なる、より単純な形態的特徴を持っている。状態動詞の語根はどれも母音 a で終わり、屈折接辞を担う補助動詞 *an*「ある」が語根に接続する。語根と補助動詞が融合しつつ、語根末の a と補助動詞の語頭の a が一短母音になることが多い。一方、焦点標識 *=du* や主題標識 *=ya* が介入し、補助動詞を分離することもできる。

状態動詞の屈折情報が専ら補助動詞によって表されるので、存在を表す一般動詞 *an* と同じく活用が不規則的である（例：否定形 *minun*、連体形 *aru*）。さらに、感嘆形（*-anu*、例：*thaga*(*-a*)*nu*「高い !」）や副詞形（*-gu*、例：*thaga-gu*「高く」）のように、一般動詞「ある」の活用には存在しない活用形も見られる。一方、状態動詞は意味解釈上の理由から、テンス・アスペクト・ムードの活用形や副動詞の多くを欠いている。

さらに、一部の状態動詞は上で記述した a で終わる短い語幹の他にそれに *-sa* が接続した長い語幹（例：「高い」*thaga-an/thaga-sa-an*）を持っているが、その違いは未詳である。

5 統語論

ドゥナン語は主要部後位型、従属部表示型の言語であり、基本語順は S(X)V(自動詞文)、A(X)PV（他動詞文）であるが、項は省略されることが多く、項や修飾句の語順も比較的自由である。疑問文などで特定の語を前置または後置する必要はない。名詞句内の修飾句は主要部名詞に先行し、名詞句全体の統語・意味的役割は接語によって表される。

表13　状態動詞語形

3	4	5	例：「高い」
	現在	直説	thaga-n
		連体	thaga-ru
		感嘆	thaga-nu
非完了		状況	thagar-uba
		条件	thagar-ya
	過去	直説	thaga-ta-n
		連体	thaga-ta-ru
	現在	直説	thaga-minu-n
否定		連体	thaga-minu
	過去	直説	thaga-minu-ta-n
		連体	thaga-minu-ta-ru

5.1　格標示

ドゥナン語はS（自動詞の主語）とA（他動詞の主語）が同一の格標識（主格）を受ける対格型言語であるが、この格標示は現れないことも多い。他の琉球諸語と異なり、主格は常に *=ŋa* で表示され、名詞の階層が関与しない。対格の標識がなく、P（他動詞の目的語）は常に無標である。三項動詞の間接目的語や使役・受身構文の降格項は方向格 *=nki* で表示される。名詞句述語文の場合、コピュラの主語は主格で表示され、名詞句述語は無標である。

(4)　[*agami=ŋa*]$_S$　*maasiku*　*bu-n.*
　子ども =NOM たくさん いる-IND
‘たくさんの子どもがいる。’（自動詞）

(5)　[*agami=ŋa*]$_S$　[*min*]$_P$ *num-u-n.*
　子ども =NOM　水　飲む-PRES-IND
‘子どもが水を飲む。’（他動詞）

(6) [*agami=ŋa*]$_{S}$ [*nma=nki*]$_{E}$ [*min*]$_{P}$ *num-amir-u-n.*
子ども =NOM 馬 =DIR 水 飲む-CAUS-PRES-IND
‘子どもが馬に水を飲ませる。’（二重他動詞）

5.2 名詞句

名詞句は修飾要素が主要部を先行する主要部後位構造を持つ。名詞句はさらに役割標識が、また述語の場合はコピュラが後続することがあり、これらを含めて拡張名詞句 ((extended) N(oun) P(hrase)) と呼ぶ。名詞句の主要部は名詞的要素であり、修飾要素は連体詞、連体修飾節、属格名詞句などである。

(7) [[[*isu=ni* *ntu-i* *bu-ru*]$_{MODIF}$ [*agami*]$_{HEAD}$]$_{NP}$=*ŋa*]$_{EXT\ NP}$ *nai*
椅子 =LOC 座る-MED IPF-PTCP 子ども =NOM 今
that-u-n.
立つ-PRES-IND
‘椅子に座っている子どもが今立つ。’

状態動詞を含む句がいわゆる形容詞 (property concept) 句として名詞を修飾しうる。このとき状態動詞は、一般動詞と同様に連体形を取る。

(8) [[*khanu ttu=ka* *mabin* *abya-ta-ru*]$_{MODIF}$ [*ttu*]$_{HEAD}$]$_{NP}$
DIST 人 =CMP もっと 美しい-PST-PTCP 人
‘あの人より美しい人’

5.3 述語

5.3.1 動詞述語

動詞述語は、屈折辞をともなう動詞単体、もしくは中止形の主動詞に屈折辞をになう補助動詞が後接した構造を取る。主動詞と使役や受身などの意味を持つ補助動詞によって述語全体が取る項の数が決定され、補助動詞はさらに時制、アスペクト、モダリティ、尊敬などの、述語全体が持つ文法的意味を決める。

主動詞＋補助動詞の構造は主動詞と補助動詞がそれぞれ独立した語を成す分析的述語と、両者が複合述語として機能する構造の二種類に分類される。両構造において主動詞は時制などを持たない中止形を取るが、前者では焦点標識

=du を主動詞と補助動詞の間に挿入することが可能であり、後者ではそれが不可能である。それぞれの例を (9)、(10) に示す。

(9) *sumuti khat-i=du bu-ru=na?*
本 書く-MED=FOC IPF-PTCP=YNQ
'本を書いているか？'

(10) *khat-i-busa-n*
書く-MED-DESID-IND
'本を書きたい。'

5.3.2 名詞述語

名詞句はそのままで述語となり、屈折を標示する必要がある場合以外コピュラをともなわない (11)（(*X) は X の実現がその文を非文とすることを表す）。コピュラは不規則活用を持つ存在動詞 *an* と、否定形以外同じ活用を持ち、焦点共起 (12a)、否定 (12b)、過去時制 (12c) を表す場合に屈折して名詞句述語に後続する。

(11) *khari=ya dunan-ttu* (**a-n*).
DIST=TOP 与那国-人 （*COP-IND）
'彼／彼女は与那国の人だ。'

(12) a. *khari=ya dunan-ttu=du* {*a-ru, *∅*}.
DIST=TOP 与那国-人 =FOC {COP-PTCP, *∅}
'彼／彼女は与那国の人だ。'

b. *khari=ya dunan-ttu=ya* {*ar-anu-n, *∅*}.
DIST=TOP 与那国-人 =TOP {COP-NEG-IND, *∅}
'彼／彼女は与那国の人ではない。'

c. *anu=ya nkaci=ya maihuna* {*a-ta-n, *∅*}.
1SG=TOP 昔 =TOP おりこうさん {COP-PST-IND, *∅}
'私は昔おりこうさんだった。'

5.4 複文

副詞節は動詞の中止形や副動詞を用いて作られる。

(13) [*thagaramunu=du a-ibi*]$_{\text{ADV CL}}$ *atara khir-u-n.*
宝物 =FOC COP-CSL 大切 する-PRES-IND
'宝物だから、大切にする。'

名詞を修飾する連体修飾節の述語は連体形を取り、名詞句の修飾要素となる。その際関係代名詞などのリンカーは現れない。

(14) [*khami bu-ru*]$_{\text{ADN CL}}$ *nma*
あそこ.LOC いる-PTCP 馬
'あそこにいる馬'

動詞の補語となる複文は、連体修飾節を含む *=nsu*「もの・こと」などの形式名詞を主要部とする名詞句と、(15) のように発話動詞の補語として現れる引用節がある。

(15) [*anu=du nn-anu khatarai khir-iba*]*=ndi umu-i,*
1SG=FOC 見る-NEG.PTCP ふり する-CIRC=QT 思う-MED
'（その女性は）私を見ないふりをするんだと思って'（加治工 2004: 43）

5.5 文のタイプ

5.5.1 肯定文

肯定文では、主述語が動詞述語の場合は通常 (16) で示すように直説法の形を取り、名詞述語の場合は前述のとおり屈折を表示する必要があるときをのぞいて名詞句がそのまま述語となる。

(16) *nai=gara i h-u-n do.*
今 =ABL ごはん 食べる-PRES-IND SFP
'今からごはんを食べるよ。'

存在文は、有情物には *bun*、無情物は *an* の存在動詞を用いて表し[*6]、主語が

[*6] ただし船のような乗り物は無情物でありながら *bun* の方で表される。

存在する場所は所格 =*ni* で標示する。

(17) *khunu da=ni agami maasiku bu-n do.*
PROX 家 =LOC 子ども たくさん いる-IND SFP
'この家に子どもがたくさんいるよ。'

ドゥナン語の所有文は存在文と同様に、主述語に存在動詞を用い、所有者が所格 =*ni* で表示される。存在文同様、主語の有情性によって存在動詞が選択される。

(18) a. *khanu ttu=ni agami maasiku {bu, *a}-n do.*
DIST 人 =LOC 子ども たくさん いる-IND SFP
'あの人に子どもがたくさんいる。'

b. *khanu ttu=ni din maasiku {*bu, a}-n do.*
DIST 人 =LOC お金 たくさん いる-IND SFP
'あの人にお金がたくさんある。'

5.5.2 疑問文

諾否 (Yes/No) 疑問文には文末詞 =*na* が現れる。文末詞 =*na* は主述語となる動詞の直説形から-*n* を取った形式（焦点共起の場合は連体形）に接続する (19)。また、主述語が名詞句の場合も、役割標識の有無に関わらず =*na* が接続する (20)。

(19) *khuruma mut-i bu=na?*
車 持つ-MED IPF=YNQ
'車を持っているか？'

(20) a. *khami bu-ru nma=ya Dunan-nma=na?*
あそこ.LOC いる-PTCP 馬 =TOP 与那国-馬 =YNQ
'あそこにいる馬は与那国馬か？'

b. *thabi nma=nki=bagin hi-ta=nga? Hokkaido=nki=bagin=na?*
旅 どこ =DIR=INCL 行く-PST=WHQ 北海道 =DIR=INCL=YNQ
'旅はどこまで行ったか？北海道までか？'

主述語に動詞句を持つ疑問詞疑問文には、文末詞 *=nga* が接続し、疑問詞には役割標識 *=ba* が接続することもある。

(21) a. *su=ya tha=ŋa war-u=nga?*
今日 =TOP 誰 =NOM いらっしゃる-PRES=WHQ
'今日は誰がいらっしゃるか？'

b. *nda=ya Tharu=nki nu(=ba) thura=nga?*
2SG=TOP 太郎 =DIR 何 (=BA) あげる =WHQ
'あんたは太郎に何をあげるか？'

主述語が名詞句の疑問詞疑問文では、文末詞 *=ya* が主述語に接続する。

(22) a. *Dunan-ccima=ya nma={ya, *nga}?*
与那国-島 =TOP どこ =WHQ
'与那国島はどこか？'

b. *nma=ŋa(=ba) Dunan-ccima=ya?*
どこ =NOM(=BA) 与那国-島 =WHQ
'どこが与那国島か？'

5.5.3 命令文

命令文は主述語に命令か禁止の接辞を接続させることで作られる。

(23) a. *da=nki hir-i.*
家 =DIR 行く-IMP
'家へ行け。'

b. *da=nki hi-nna.*
家 =DIR 行く-PROH
'家へ行くな。'

5.5.4 否定文

動詞句を主述語に持つ否定文は、一般的に主述語に否定の接辞-*anu*-を接続させて作られる。存在動詞 *an* は特殊な否定形 *minun* を有する (24a)。*minun* は状態動詞と動詞の完了形の否定としても現れる。名詞句を主述語に持つ否定文は、コピュラに否定の接辞を接続させた形式 *aranun* で表す (24b)。

(24) a. *khumi=ya baga nnani=ya {minu-n, *ar-anu-n}.*
ここ.LOC=TOP 1.GEN 着物 =TOP {ない-IND, *COP-NEG-IND}
'ここには私の着物はない。'

b. *khu=ya baga nnani=ya {*minu-n, ar-anu-n}.*
PROX=TOP 1.GEN 着物 =TOP {* ない-IND, COP-NEG-IND}
'これは私の着物ではない。'

存在動詞以外にも特殊な否定形を持つものがある。可能・受身・被害 (malefactive) を表す補助動詞 *-arir-* の否定形は、単純に否定の接辞を後接させた形 *-ariranu-*ではなく*-aninu-*である。また例文 (25) で、動詞の継起形の否定に特殊な形式*-nki* が用いられていることを示す。その他の特殊な否定形は5.5.3節の禁止形、5.10節の特殊な係り結び形参照。

(25) *mata nni ccaŋir-anu-nki=du bu-ru=na?*
また 米 とぐ-NEG-NEG.SEQ=FOC IPF-PTCP=YNQ
'また米をとがないでいるか？'

5.6 時制とアスペクト

5.6.1 時制

主文の過去時制は動詞接辞-(*i*)*ta-*、現在と未来（非過去）時制は-*u-*/∅ によって表される。

(26) *nnu=ya Tharu=ŋa uta khi-ta-n do.*
昨日 =TOP 太郎 =NOM 歌 する-PST-IND SFP
'昨日は太郎が歌を歌ったよ。'

5.6.2 アスペクト

補助動詞 *bun* は、動詞の中止形に後続し、非完結相の意味を表す。例えば (27a) の例では、*bun* が動作主主語動詞 *khagun*「書く」に後続して現在（非過去）時制の形を取り、現在進行「（発話時において）書いている」という解釈を導く。また (27b) では、*bun* が *ubuirun*「覚える」に後続して非過去時制の形を取り、主述語 *ubui bun* が状態動詞「（発話時において）覚えている」という解

釈を受ける。

(27) a. *khat-i bu-n.*
書く-MED IPF-IND
'書いている。'

b. *khanu ttu=nu na ubu-i bu=na?*
DIST 人 =GEN 名前 覚える-MED IPF=YNQ
'あの人の名前を覚えているか？'

完了の意味を表す接辞-(*y*)*a/yu/u*-は動詞語根に接続し、動詞語根が記述する事象の完了結果が、基準時において継続していることを表す[*7]。先述の非完結相とは異なる分布を示すが、ドゥナン語では過去時制を取る動詞とは分布が非常によく似ている。過去時制を取る動詞と動詞の完了形の正確な差異の記述は今後の研究課題であるが、完了の接尾辞に過去の接尾辞が続いた過去完了形が存在することから両者の間に意味的な差異があることがわかる。

(28) a. *Tharu, di {khat-ya=na, khat-ita-na}?*
太郎 字 {書く-PERF=YNQ, 書く-PST=YNQ}
'太郎、字を書いたか？'

b. *oo, {khat-ya-n, khat-ita-n}.*
はい {書く-PERF-IND, 書く-PST-IND}
'はい、書いた。'

動詞完了形の否定は、否定の接辞-*anu*-ではなく存在動詞の否定形-*minu*-を動詞の中止形に接続させて表す。このことからも動詞完了形は、歴史的に動詞の中止形＋存在動詞 *an* と分析可能であることがわかる。

(29) a. *khica Tharu=nki thuras-ya-n.*
さっき 太郎 =DIR あげる-PERF-IND
'さっき太郎にあげた。'

[*7] 伊豆山 (2006)は本稿で完了の接辞と呼ぶ形態素が一種の証拠性表現だと主張している。伊豆山 (2006)で描写されている文脈でデータの再現を試みたが、報告された結果を得ることができなかったため、今後の研究課題とする。

b. *madi Tharu=nki thuras-i minu-n.*
まだ 太郎 =DIR あげる-MED IPF.NEG-IND
‘まだ太郎にあげていない。’

5.7 ムードと様相

5.7.1 ムード

肯定、命令、禁止のムードは先述のとおりである。これとは別に動詞勧誘形-*indangi* が、勧誘を表すことが認められる。

(30) *ayami-habiru nn-iti=gara khais-i h-indangi.*
模様-蝶 見る-SEQ=ABL 帰る-MED 行く-HOR
‘アヤミハビル（ヨナグニサン）を見てから帰ろう。’

また、補助動詞 *busan* は動詞の中止形に後続し、「～したい」という希望を表す。現代日本語共通語と異なり、主動詞の P 項は主格で表示することができない。

(31) *anu=ya bansuru(*=ŋa) ha-i-busa=du a-ru.*
1SG=TOP グァバ (*=NOM) 食べる-MED-DESID=FOC COP-PTCP
‘私はグァバが食べたい。’

可能を表す表現として、二つの表現が観察される。一つは状況可能を表す接辞-*arir*-であり、もう一つは主語の能力可能を表す補助動詞 *ccun* である。

(32) a. *gaku ma simar-ya da=nki khais-i hir-arir-u-n.*
学校 もう 終わる-COND 家 =DIR 帰る-MED 行く-POT-PRES-IND
‘学校がもう終わったので、家へ帰れる。’

b. *khanu ttu=ŋa santi tt-i ccu-n.*
DIST 人 =NOM 三線 弾く-MED ABT-IND
‘あの人は三線が弾ける。’

状態述語には、驚嘆を表す形式が存在する。

(33) *aca-(a)nu!*
暑い-EXCLM
'暑い！'

5.7.2 証拠性

ドゥナン語には発話が依拠する情報の種類を示す、証拠性 (evidentiality) 表現が数多く存在する。(34) に観察される*-indangi* (*an*) は、「木がやがて倒れる」ことが、話者の推論によるものであることを示す証拠性表現の例である。

(34) *khanu khi dagati thur-indangi=du ar-u.*
DIST 木 やがて 倒れる-EVID.INFER=FOC ある-PTCP
'（地面から出ている根を見て）あの木はやがて倒れそうだ。'

(34) の発話は、話者が木を見て観察したことにもとづいており、推論ではなく視覚情報に依拠しているともいえる。しかし*-indangi* (*an*) を主述語に含む発話 (35) は、笑っている子どもを目の前で見ているときは適切ではなく、例えば隣りの部屋にいる姿の見えない子どもの笑い声を聞いたときなどでしか適切ではない。

(35) a. *du=ya nn-aninu-ŋa bara-i-khui=ya kk-ariru-n.*
姿 =TOP 見る-POT.NEG-が 笑う-MED-声 =TOP 聞く-POT-IND

b. *unu agami=ya shana-kh-indangi a-n.*
その 子ども =TOP 嬉しい-する-EVID.INFER ある-IND
'姿は見えないが、笑い声は聞こえる。あの子どもは嬉しそうだ。'

さらに別の例をあげると、一つの籠には魚が、もう一つの籠には果物が入っていると話者が教えられ、一つを開けて魚が入っているとわかったとき、(36a) は適切な発話である。(36a) の真偽は籠の外見に依拠しているのではなく、(36b) の 1–3 をもとに話者が 4 を導出した推論にもとづいている。同様に、(37) の例も「太郎が家にいる」ことが、ランプがついていることをもとに話者が推論した点に依拠していることを示している。

(36) a. *khari=ni=ya nnin bansuru=ŋa=du ir-indangi*
DIST=LOC=TOP みかん グァバ =NOM=FOC 入る-EVID.INFER
'あれにはみかんやグァバが入っているんだろう。'

b. 1. 一つの籠には魚が入っている
2. もう一つの籠には果物が入っている
3. 箱 A には魚が入っている
4. 箱 B には果物が入っている

(37) *thuru khi-rari=du bu-ru=yungara, Tharu da=ni bu-indangi*
ランプする-PASS=FOC IPF-PTCP= から 太郎 家 =LOC いる-EVID.INFER
a-n.
ある-IND
'ランプがついているから、太郎は家にいるんだろう。'

現代日本語共通語には、(34)–(37) の状況すべてで用いることができる言語表現が存在しない。推論の証拠性表現として用いることのできる「ようだ」「みたいだ」は、(35) 以外の状況では適当ではなく、同様の証拠性表現「（動詞語根）＋そうだ」は、論理的推論を用いた (36a) の状況では不適切である。必然性の様相表現「はずだ」は、(36)、(37) 以外では適切ではない。

5.7.3 様相表現

必然性 (necessity) や可能性 (possibility) の様相は、本動詞に後述し文の主述語の一部となる要素によって表される。例えば (38a) は、連体修飾節がかかる形式名詞 *hadi* が文の主述語となり、認識による必然性 (epistemic necessity)（「知りうる限り...であるはずだ」[*8]）を表す。一方義務による必然性 (deontic necessity)（「現在の状況によると...であるはずだ」）は (38b) にある、複合動詞的表現を用いて表される。

(38) a. *khanu ttu=ya nai da=ni war-u hadi do.*
DIST 人 =TOP 今 家 =LOC いらっしゃる-PRES はず SFP
'あの人は今家にいらっしゃるはずだよ。'

b. *su=ya ttu=ŋa war-u=yungara, thaigu da=nki*
今日 =TOP 人 =NOM いらっしゃる-PRES= から はやく 家 =DIR

[*8] 話者の直感を鑑みると、必然性の様相表現とするには解釈が強すぎるかもしれず、単に「と思う」程度の解釈が適切かもしれない。

hir-anu-tu *nar-anu-ta-n.*
帰る-NEG-COND なる-NEG-PST-IND
‘今日は人がいらっしゃるから、早く家へ帰らないとならなかった。’

認識による可能性 (epistemic possibility)（「知りうる限り…であるかもしれない」）と許可による可能性 (deontic possibility)（「…してもよい」）も、本動詞に後述する要素によって表される (39a, b)。

(39) a. *khanu ttu=ya* *nai da=ni* *waru=kan* *bagar-anu-n.*
DIST 人 =TOP 今 家 =LOC いらっしゃる = かも わかる-NEG-IND
‘あの人は今家にいらっしゃるかもしれない。’

b. *gaku ma* *simar-ya* *da=nki* *khais-i* *hi-ta-n=tin*
学校 もう 終わる-COND 家 =DIR 帰る-MED 行く-PST-IND= ても
nsa-n.
よい-IND
‘学校がもう終わったので、家へ帰ってもよい。’

5.8 項構造と結合価に関する表現

5.8.1 使役

動詞接辞-*amir*-は本動詞に接続して使役動詞を作り、主格で表示される使役者項を一つ増やす。被使役者項となる、非使役文の S/A 項は方向格 =*nki* か所格 =*ni* で標示される。

(40) a. *Tharu=ŋa* *i* *maga-ta-n.* （非使役文）
太郎 =NOM ごはん 作る-PST-IND
‘太郎がごはんを作った。’

b. *a=ŋa* *Tharu=nki* *i* *mag-ami-ta-n.* （使役文）
1SG=NOM 太郎 =DIR ごはん 作る-CAUS-PST-IND
‘太郎にごはんを作らせた。’

5.8.2 受身

受動文は動詞接辞-*arir*-が本動詞に接続することによって表され、他動詞の主語が降格し、動詞の項数が一つ減少する。降格された項は表出しないか、方向格 =*nki* か所格 =*ni* で表示される斜格項として表される。能動文の P 項は主格に昇格する。

(41) a. *khunu mayu=ŋa uyantu ha-ta-n.* （能動文）
PROX 猫 =NOM ねずみ 食べる-PST-IND
'この猫がねずみを食べた。'

b. *khunu uyantu=ŋa mayu=nki h-ari-ta-n.* （受動文）
PROX ねずみ =NOM 猫 =DIR 食べる-PASS-PST-IND
'このねずみが猫に食べられた。'

5.8.3 受益

補助動詞 *thuran*（本動詞としては「与える」の意）を用いて、他の項の降格・昇格をともなわずに項を一つ増やすことができる。この項は受益者として解釈され、方向格で標示される。現代日本語共通語とは異なり、受益者項を増やす補助動詞は受益者項の人称に関わらず *thuran* が用いられる。

(42) a. *Tharu=ŋa anu=nki thuru kh-i thura-ta-n.*
太郎 =NOM 1SG=DIR ランプ する-MED BEN-PST-IND
'太郎が私にランプをつけてくれた。'

b. *a=ŋa Tharu=nki thuru kh-i thura-ta-n.*
1SG=NOM 太郎 =DIR ランプ する-MED BEN-PST-IND
'私が太郎にランプをつけてあげた。'

5.8.4 被害 (Malefactive)

動詞接辞-*arir*-は受動文を作る他に、被害者項を増やす機能も持つ。例えば (43) では、自動詞 *nagun*「泣く」に -*arir*- が接続し、主題標識[*9]で表示された被害者項 *anu*「私」が現れ、自動詞の主語 *agami*「子ども」は方向格に降格する。

[*9] コーパス内に格標示付きの被害者項を含むデータが存在しないため、主題標識以外の格標示は未確認。

被害者項は、*-arir-*が接続する動詞とその主語が表す出来事によって、被害を受けるものとして解釈される。

(43) *anu=ya agami=nki nag-ari-ti, sikama khir-aninu-ta-n.*
1SG=TOP 子ども =DIR 泣く-MAL-SEQ 仕事 する-POT.NEG-PST-IND
'私は子どもに泣かれて、仕事ができなかった。'

5.8.5 再帰性と相互動作

再帰性と相互動作は、ドゥナン語では動詞要素としては標示されない。前者は再帰代名詞 *sa* もしくは *du* を用いて表される。後者を表す形態素は存在しないようである。相互動作は、複数主語を持つ他動詞文を用い、動詞の P 項を表示しないことで表現されることが多い。

(44) *Tharu=ŋa {sa, du} khaŋan=ki ucus-iti nni-ta-n.*
太郎 =NOM REFL 鏡 =DIR 映す-SEQ 見る-PST-IND
'太郎が自分を鏡に映して（自分を）見た。'

5.8.6 動詞の自他交替

(45) のように自他交替を示す動詞が存在するが、そのプロセスは予測不能かつ生産的ではなく、自他交替は語彙的情報となっている[*10]。

(45) a. *nai=gara Tharu=ŋa that-u-n.*
今 =ABL 太郎 =NOM 立つ-PRES-IND
'今から太郎が立つ。'

b. *nai=gara Diru=ŋa Tharu thata-n.*
今 =ABL 次郎 =NOM 太郎 立てる-IND
'今から次郎が太郎を立たせる。'

[*10] 完了の接尾辞の選択はある程度他動性との相関が見られるが、例外も多いため、共時的な規則とはみなすことができず、歴史の名残りとみなすべきであろう。

5.9 敬語表現

ドゥナン語は、主語が指示する者が社会的に高い地位にあることを述語要素によって表示する尊敬語体系を持つ。*uyan*「召し上がる」や *warun*「なさる・いらっしゃる・ていらっしゃる」など特有の尊敬表現を持つ動詞も存在するが、ほとんどの動詞では補助動詞 *warun* を動詞の中止形に後続させることで尊敬動詞を作る。

(46) *asa=ŋa* *uta kh-i* *wa-i* *bu-n.*
おじいさん =NOM 歌 する-MED HON-MED IPF-IND
'おじいさんが歌を歌っていらっしゃる。'

非常に限られた数の動詞においては、主語が指示する者が他の項よりも社会的に低い地位にあることを表す特有の形式（「謙譲語」）が確認されている。*ccarirun*「申し上げる」や *thabararirun*「いただく」などがその例だが、これらは限られた場面でのみ用いられる定型句としてしか使われていない。また、現代日本語共通語とは異なり、聞き手に対する敬意を表す形式（丁寧語）は存在しない[*11]。

5.10 焦点共起（係り結び）

ドゥナン語では、古代日本語や他の琉球諸語に似た、焦点共起現象、いわゆる係り結び現象が観察される。狭義の係り結び現象は、ドゥナン語の場合、焦点標識 =*du* が主文中にあるとき、またそのときに限り、文の主述語は直説法形ではなく連体形を取る、と記述できる。実際に (47) のような最少対が多く観察される。

(47) *nai=du* *ttam-ya-{ru, *n}.*
今 =FOC 知らせる-PERF-{PTCP, *IND}
'今知らせる。'

また、否定の述語 (*-anu-*や *minun*) には、連体形とは異なる係り結び形が存在するが、これは先行研究ではこれまで報告されていない。(48) で例にあげる否

[*11] 受身・可能と同じ形式の接尾辞-*arir*-が接続した動詞が、聞き手に対する丁寧さを表すと思われる用例が観察されているが、詳細は今後の研究に譲る。

定接辞が接続した動詞述語は、文中に *=du* が存在するが、係り結び現象として予測される連体形 *hir-anu* でも、通常の直説法形 *hir-anu-n* でもなく、*hir-anu-ru* という形で表れている。

(48) *khama=ya* *thwa-bi=du* *hir-anu-ru.*
あそこ =TOP 遠い-CSL=FOC 行く-NEG-MSB
'あそこは遠いので、行かない。'

しかしながら、文中に *=du* が存在するが主述語が直説法形である場合や、その逆に *=du* が存在しないが主述語が連体形を取る場合など、先述の狭義の係り結び現象にとっては反例となる発話も観察される。ドゥナン語においては、*=du* と連体形・係り結び形の共起はそれぞれの要素の分布環境が非常に似通っていることによる傾向であると考えられるかもしれない。

6 自然談話資料

以下にドゥナン語の自然談話資料として、与那国民俗資料館館長の池間苗氏による資料館案内の一部を掲載する。

[1] *dunan=nu* *nkacihanasi kh-i* *ccarir-u-n.*
与那国 =GEN 昔話 する-MED 申し上げる-PRES-IND
与那国の昔話を話してさしあげよう。

[2] *sirunna.*
シルンナ
「シルンナ」

[3] *sirunna=ndi* *nd-u=nsu=ya*
シルンナ = と 言う-PRES= もの =TOP
シルンナと言うものは

[4] *nkuti=ŋa* *nmarir-uba* *a*
赤ちゃん =NOM 生まれる-COND FILL
赤ちゃんが生まれたら

[5] *duŋuti=nki uyabi buhanna ha-iti*
門 =DIR　上　しめ縄　張る-SEQ
門の上にしめ縄を張って

[6] *ndai=tu　nidi=nki sirunna　saŋ-iti*
左 =COM 右 =DIR シルンナ 下げる-SEQ
左と右へシルンナを下げて

[7] *nkuti　mmar-u-n　do=ndi*
赤ちゃん 生まれる-PERF-IND よ = と
「赤ちゃんが生まれたよ」と

[8] *muuru=nki ccarir-u　munu*
みな =DIR 知らせる-PRES もの
みなに知らせるものだ。

[9] *khara khanu guma-ru　mata sirunna=ya　khari=ya　mata*
FILL FILL 小さい-PTCP また シルンナ =TOP あれ =TOP また
小さいシルンナは、それはまた、

[10] *nkuti　mmarir-u　duguru=ni*
赤ちゃん 生まれる-PRES ところ =LOC
赤ちゃんが生まれるところに

[11] *abu=ŋa　niŋai=du　bu-ru　khimunu*
おばあさん =NOM 祈り =FOC IPF-PTCP するもの
おばあさんが祈りをするもの、

[12] *niŋa-i　wa-ta-ru　duguru=nu　munu=du*
祈り-MED HON-PST-PTCP ところ =GEN もの =FOC

[13] *na-i　bu-ru.*
なる-MED IPF-PTCP
祈りなさったところのものとなっている。

[14] *khu=ya mata dwai=nu basu=ni binga=nu*
これ =TOP また 祝い =GEN とき =LOC 男 =GEN
これはまた祝いのときに、男の…

[15] *<de kore=wa> dama.*
でこれは 糸車
でこれは、糸車。

[16] *dama=ndi nd-u munu=ya*
糸車 = と 言う-PRES もの =TOP
糸車というのは

[17] *abu-nta=ŋa unni unu dama=nki mat-iti*
母親-PL=NOM そのように その 糸車 =DIR 巻く-SEQ
母親とかがこのようにその糸車に巻いて

[18] *bu nm-i utut-i wa-ta=gara=ya*
麻糸 紡ぐ-MED おく-MED HON-PST=ABL=TOP
麻糸を紡いでおかれたら

[19] *unu dama=nki mat-iti e isi mata*
その 糸車 =DIR 巻く-SEQ FILL する.MED また
その糸車に巻いて、えー、そう、また

[20] *khu=ya mata ndati=si khu=si*
これ =TOP また ボビン =INST これ =INST
これはボビンで、これで

[21] *khunni mat-i utug-uba*
このように 巻く-MED おく-COND
このように巻いておけば

[22] *nunu ur-u basu=ni kk-u munu.*
布 織る-PRES とき =LOC 使う-PRES もの
布を織るときに使うものだ。

[23] *khu=ya mata hatamunu.*
これ =TOP また 機織り機
これは機織り機だ。

[24] *hatamunu=ya nnani danindu=nu nnani ur-u munu.*
機織り機 =TOP 着物 家族 =GEN 着物 織る-PRES もの
機織り機は着物を、家族の着物を織るものだ。

[25] *khu=ya mata minuŋa=nu abuta sikama.*
これ =TOP また 女 =GEN 母親 仕事
これは女の、母親の仕事だ。

[26] *khu=ya aminagu.*
これ =TOP ゆりかご
これはゆりかごだ。

[27] *aminagu=ndi=ya nkuti nus-iti*
ゆりかご =QUOT=TOP 赤ちゃん 乗せる-SEQ
ゆりかごとは、赤ちゃんを乗せて

[28] *naci aca-ru basu=ni nus-iti*
夏 暑い-PTCP とき =LOC 乗せる-SEQ
夏暑いときに乗せて

[29] *naci=n huju=n abu-nta=ŋa*
夏 =INCL 冬 =INCL 母親-PL=NOM
夏も冬も母親とかが

[30] *haraharadii haraharadii=ndi <konnani sagete>*
ねんねんころり ねんねんころり =QT こんなに下げて
ねんねんころりと、こんなに下げて

[31] *mati sjana kh-i nind-i bu-ta-ru.*
とても 嬉しい する-MED 寝る-MED IPF-PST-PTCP
とても嬉しそうに寝ていた。

略語一覧

1	first person
2	second person
ABL	ablative
ABT	abt
BEN	benefactive
CAUS	causative
CIRC	circumstantial
CMP	comparative
COM	comitative
COND	conditional
COP	copula
CSL	causal
DESID	desiderative
DIM	diminutive
DIR	directive
DIST	distal
EVID	evidential
EXCL	exclusive
EXCLM	exclamative
FILL	filler
FOC	focus
GEN	genitive
HON	honorific
HOR	hortative
IMP	imperative
INCL	inclusive
IND	indicative
INFER	inferential
INST	present
IPF	imperfective
LOC	locative
MAL	malefactive
MED	medial
MSB	*musubi*
NEG	negative
NOM	nominative
PASS	passive
PERF	perfective
PL	plural
POT	potential
PRES	present
PROH	prohibitive
PROX	proximal
PST	past
PTCP	participle
QT	quotative
QUOT	quotative
REFL	reflexive
SEQ	sequential
SFP	sentence final particle
SG	singular
TOP	topic
WHQ	*wh*-question
YNQ	yes-no question

謝辞

本稿の執筆にあたり、池間苗氏、前黒島勇市氏、三蔵敞氏、三蔵順子氏をはじめ、与那国町教育委員会と多くの与那国島民の方にご協力いただいた。また自然談話資料の録音・録画データはパトリック・ハインリヒ氏（獨協大学）から提供されたものである。自然談話資料の書き起こしには前黒島氏に全面的にご協力いただいた。ここに心より御礼申し上げる。なお、本研究は日本学術振興会科研費（課題番号 22·4831（山田）、22·0100（ペラール）、22720161（下地））の助成を受けている。

参照文献

Hayashi, Yuka. 2010. Ikema (Miyako Ryukyuan). In Shimoji, Michinori & Pellard, Thomas (eds.), *An introduction to Ryukyuan languages*, 167–188. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. http://repository.tufs.ac.jp/simple-search?query=An+introduction+to+Ryukyuan+languages%5C&submit=simple-search.

平山輝男（編）1988. 『南琉球の方言基礎語彙』東京：桜楓社.

平山輝男・中本正智. 1964. 『琉球与那国方言の総合的研究』東京：明治書院.

法政大学沖縄文化研究所（編）1987a. 八重山・与那国島 special issue of 「琉球の方言」11 http://hdl.handle.net/10114/11991.

法政大学沖縄文化研究所（編）1987b. 八重山・与那国島 special issue of 「琉球の方言」12 http://hdl.handle.net/10114/11990.

池間苗. 1998. 『与那国ことば辞典』与那国町：池間龍一.

池間苗. 2003. 『与那国語辞典』与那国町：池間苗.

岩瀬博・松浪久子・冨里康子・長浜洋子. 1983. 『与那国島の昔話：沖縄県八重山郡与那国町』(南島昔話叢書 10) 京都：同朋舎.

伊豆山敦子. 2002. 「琉球八重山（与那国）方言の文法基礎研究」真田信治（編）『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究 (2)』(環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A4-012), 99–135. 吹田：大阪学院大学情報学部.

伊豆山敦子. 2006. 「エヴィデンシャリティ（証拠様態）：与那国方言の場合」『マテシス・ウニウェルサリス』7(2): 43–55.

Izuyama, Atsuko. 2012. Yonaguni. In Tranter, Nicolas (ed.), *The languages of Japan and Korea*, 412–457. New York: Routledge.

加治工真市. 1980. 「与那国方言の史的研究」黒潮文化の会（編）『黒潮の民族・文化・言語』, 491–516. 東京：角川書店.

加治工真市. 2004. 「与那国方言について」『沖縄芸術の科学』16: 17–74.

ローレンス ウエイン. 2008.「与那国方言の系統的位置」『琉球の方言』32: 59–67. http://hdl.handle.net/10114/11867.

日本放送協会（編）. 1999. 『ＣＤ－ＲＯＭ版全国方言資料』全 12 巻. 東京：日本放送出版協会.

大城健. 1972. 「語彙統計学（言語年代学）的方法による琉球方言の研究」服部四郎先生定年退官記念論文集編集委員会（編）『現代言語学』, 533–558. 東京：三省堂.

Pellard, Thomas. 2009. *Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū*. Paris: École des hautes études en sciences sociales. (Doctoral dissertation). https://tel.archives-ouvertes.fr/tel-00444150.

Shimoji, Michinori. 2011. Irabu Ryukyuan. In Yamakoshi, Yasuhiro (ed.), *Grammatical sketches from the field*, 77–131. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Shimoji, Michinori & Pellard, Thomas (eds.). 2010. *An introduction to Ryukyuan languages*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. http://repository.tufs.ac.jp/simple-search?query=An+introduction+to+Ryukyuan+languages%5C&submit=simple-search.

高橋俊三. 1975. 「沖縄県八重山郡与那国町の方言の生活語彙」藤原与一（編）『方言生活語彙』(方言研究叢書 4), 159–217. 東京：三弥井書店.

高橋俊三. 1997. 「与那国方言」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『日本列島の言語』, 873–882. 東京：三省堂.

内間直仁. 1980. 「与那国方言の活用とその成立」黒潮文化の会（編）『黒潮の民族・文化・言語』, 447–490. 東京：角川書店.

上野善道. 2009. 「琉球与那国方言のアクセント資料 (1)」『琉球の方言』34: 1–30. https://doi.org/10.15002/00012516.

上野善道. 2010. 「与那国方言のアクセントと世代間変化」上野善道教授退職記念論集編集委員会（編）『日本語研究の 12 章』, 504–516. 東京：明治書院.

上野善道. 2011.「与那国方言動詞活用形のアクセント資料 (2)」『国立国語研究所論集』2: 135–164. https://doi.org/10.15084/00000485.

山田真寛. 近刊.「与那国語の動詞形態論：証拠性研究の基礎資料として」田村早苗（編）『証拠と推論：頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム報告書』.

山田真寛・Pellard, Thomas. 2013.「ドゥナン（与那国）語の言語使用」田窪行則（編）『琉球列島の言語と文化：その記録と継承』, 93–107. 東京：くろしお出版 https://hal.archives-ouvertes.fr/hal-01289786.